

すごいタイトルの本

みなさんはタイトルに惹かれて本を手にとったことはありませんか？今日は思わず手が伸びるようなインパクトのあるタイトルの本をご紹介します。

1冊目は、ホリー・ジャクソン/著『自由研究には向かない殺人』です。

女子高生ピップが自由研究の題材に選んだのは殺人。と言っても完全犯罪や大量殺人を企てる危険な話ではありません。ピップは5年前におきた少女失踪事件の真相を究明しようと、容疑者とされている少年の弟をバディに、自由研究の名目で真犯人を探します。容疑者の自殺により解決したとされていた事件を探るうちに、ピップの身にも危険が及んで…というスリル満点のミステリーです。事件の解決とひきかえにもたらされる友情や絡み合う人間関係の機微は切なくもあります。正義感が強くまっすぐな主人公が魅力的で、読後はとびきり爽やかな気分になれます。原題は『A good girl's guide to murder』で、直訳すると「少女のための殺人案内」ですが『自由研究には向かない殺人』とつけたところに訳者のセンスが感じられます。

2冊目は、中島京子/著『妻が椎茸だったころ』です。

表題作は、定年直後に妻に先立たれた男性が主人公。生前、妻が申し込んでいた料理教室に代わりに行くことになり、甘辛く煮た椎茸を持参するように言われます。乾物入れから干し椎茸を見つけ出し格闘していると、妻のレシピ帳を発見します。そのノートには日々の愚痴とともに、妻はかつて椎茸だったことがあるという衝撃的な告白が…。日常の中に潜む少し不思議な世界をユーモラスに描いた1冊です。

3冊目は、最果タヒ/著『「好き」の因数分解』です。

詩人であり作家でもある最果タヒさんの本は『死んでしまう系のぼくらに』、『夜空はいつでも最高密度の青色だ』、『きみの言い訳は最高の芸術』など、どれもタイトルに人を惹きつけるパワーがあります。今回紹介する本は、好きな人、キャラクター、場所など自身が愛してやまない「好き」なものたちについて語った1冊です。どうして好きなのか、そこには理由も答えもない、そんなうまく説明できない「好き」という気持ちを因数分解して解き明かすエッセイは、「好き」なものへの表現方法を豊かにしたい人におすすめです。

本のタイトルはカッコいいものや笑えるもの、内容が全く想像できないものなど、思わず手に取りたくなるような魅力のあるものがたくさんあります。タイトルを決め手に本を選んでみると、新しい本との出会いが待っているかもしれませんよ。ぜひ図書館で本との出会いをお楽しみください。